

2019年6月24日発行

BiVSの本だな 第14号

獨協大学

図書館学生サポーター **ビボス**

Bibliothek Volunteer Supporters

映画館に行こう！ 【ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス】



7月5日（金）まで神保町の岩波ホールで上映している『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』を図書館学生サポーターBiVSのメンバーで鑑賞してきました。BiVS初の試みとなった本企画。BiVSのメンバーはどんな感想を抱いたのでしょうか。

ドイツ語学科 4年 木村 沙也加

誰もが楽しめる、アメリカの図書館 ドキュメンタリー！

今回、BiVSとしては初めてとなる？（少なくとも筆者としては初めての）、映画鑑賞企画。記念すべき第1作目は、6月8日(土)現在公開中の『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』（2017年）（公式サイト <http://moviola.jp/nypl/>）。筆者の行って観た感想や関連情報をここに記しておくので、興味を持っていただけたら幸いである。

Q. ズバリ、どんな内容の映画？

本作はそのタイトルのとおり、アメリカのニューヨーク公共図書館を扱ったドキュメンタリー映画である。この図書館はニューヨーク有数の観光スポットで、公式曰く「世界中の図書館員の憧れの的」とされている。また、荘厳な19世紀初頭のボザール様式の建築で知られる本館と92(!)の分館からなる世界最大級の図書館でもある。本作を観ていると、本当に様々に分館があることがわかる。途中でどこがどこだかわけが分からなくなるなど、口が裂けても言えない…（逆にそれだけ沢山あって充実しているということだ！）。

さて、カメラはこのニューヨーク公共図書館の内側の、観光客は決して立ち入れないSTAFF ONLYの世界を見せていく。図書館の資料や活動に誇りと愛情をもって働く司書やボランティアたちの姿。何度も繰り返される幹部たちの会議（①いかにデジタル社会に対応していくのか、②ベストセラーをとるか、残すべき本をとるのか、③紙の本か電子本か、④ホームレスの問題にいかに向き合うのか等々）。普段私たちが見る表の世界（カウンターでの貸出・返却手続き、セミナー等）だけでなく、どのように情報・資料を集め、保存し、提供するのかなど、いわば図書館のブレン、裏の世界も明らかにされる。

本作が伝えんとしているところは、「公共とは何か、ひいてはアメリカ社会を支える民主主義とは何か」である。また、これからの図書館（アメリカのみならず日本の図書館も！！）がどのような意味を持つのか、その一視点をも教えてくれる。ちなみに、副タイトルのエクス・リ

ブリス (Ex Libris、原題では主タイトルとなっている) は日本語でいう蔵書票(ぞうしょひょう)ないし書票(しょひょう) のことで、本の見返し部分に貼ってその本の持ち主を明らかにするための小紙片を指す。「だれその蔵書から」という意味のラテン語からきていて、英語では bookplate といわれる。「これらがニューヨーク公共図書館の蔵書ですよ！」(ドーン!!) みたいな意味なのだろうか…。観た方は「え、自分はこう思ったんだけど」等アイデアがあれば是非教えてほしい (切実)。

Q. どんな感想を持った？

なるほど、筆者は本学の司書課程を取っているため、とりわけ作品中の幹部たちの会議の内容には「確かななあ」と思わされるところもあって興味深かった。どの議題も実際の司書課程の授業で取り上げられたものばかりで、あの先生なら何と言うかなあなどと、ふと考えたりもした。

では、司書課程を取っていないから楽しめないかと言ったら、必ずしもそうではない。むしろ、司書課程を取っていようがいまいが、また図書館を利用していようがいまいが、【誰でも！】楽しめるものである。誰でも、である。なぜそんなことが言えるのか。それは、図書館自体が基本は誰にでも開かれた場所だからである。だからこそ、舞台はアメリカだけれども、図書館

は我々をどう見ているのか、あるいは我々は図書館をどう見ているのかを考えることができる。(実は「図書館は本を借りる場所」だけではないんです!(;・`Д・´))

もちろん、そこまでとは言わずに観光客気分を楽しむのもアリだし、アメリカの「知」を誰が支えているのか、あるいは未だに蔓延る人種差別の問題など、単にアメリカを知りに行くのもアリだと思う。

ちなみに印象的だったシーンはどこかというところ、利用者から返却された資料が、ベルトコンベアに乗ってコンテナに仕分けされるシーンである。たかが仕分けのシーンかもしれないが、実際に映像を観てみると開いた口が塞がらないほどのすごい作業なのである。

まず、回転寿司のコンベアが通常の3倍速で動いている様子を思い浮かべてほしい。めちゃ速い。それがベルトコンベア速度である。そしてそのコンベアにはそれぞれ線が引かれていて、その線の内に返却された本を置いていく。もちろん、本を置くのは機械でなくて人が行なう。めちゃ速く動くコンベアに、そしてその線の内に上手く本を置くのである。しかし担当者は淡々とその業務をこなしている。筆者は早くもギブアップしそうな、かなりの作業難易度である。ハア～こいつアかなわん…。

Q. 作品形態は？

筆者が観た時は、吹替えなしの、英語音声・日本語字幕バージョンであった。なので、英語のリスニングもできて一石二鳥(?)であるし、英語とはいえブリティッシュよりの英語など、さまざまな英語が聞こえてくる。

そして、英語(もちろん英語に限らなくともよいが)をどっぷり聞くと、なぜだが「自分は英語を話せる！」錯覚に陥って、個人的にはなかなか楽しい。もちろん、実際に話せる・話せないはまた別の問題であるが…。

Q. どこで観た？

本作は全国で公開中(あるいは公開予定)であるが、大学近辺から行くのであれば、半蔵門線の神保町駅から直結の「岩波ホール」

(<https://www.iwanami-hall.com/>)

がオススメ。駅の出口はA6だったと思う。筆者は出る出口を間違えて、周辺の古書店をグルグルしていた(そのおかげで、気に入った本に巡り会えて結果オーライだったのだが…(笑))。

Q. 鑑賞券はおいくら？

前売り券を持っていない人は、1階で当日券を買うことができる(劇場は10階にあり、エレベーターで上る)。通常の学生料金は1,500円であるが、最終回(18時15分からの回)の学生料金は1,200円となる。もちろんどちらの場合も【学生証】の提示が必要だ。

Q. 上映期間は？

岩波ホールで観るならば、7月5日(金)までとなる。残念ながら夏休み期間中には被らないので、全休の日か、土曜日、日曜日にいくのがベスト。

Q. 上映時間は？

上映は、平日・休日・祝日・祭日などの日も①10時15分から、②14時15分から、そして③18時15分からである。驚くことなかれ、上映時間はおよそ3時間30分(!)。これほどの上映時間は初めてでビックリした。しかし、途中で5分の休憩が入るのでご安心を(笑)。ちなみに、公式情報では平日のほう为空いているようである。

Q. 売店は？

館内には関連グッズ・書籍以外を扱った売店はなく、劇場内は食事できないので、予めお腹を満たしておくといだらう(飲み物を飲むのは可!)。自動販売機もなかった気がするので、スタバなり何なり飲み物は持っておくと吉。もちろんトイレはあるのでご心配なく。

その他気になる情報があれば、冒頭に記した各公式サイトを見るのもよいし、直接BiVSのtwitter(@dokkyo_lib_bivs)に問い合わせいただいても構わない。

皆さんが思い思いに楽しめますように…。

総合政策学科 3年

石毛 眞子

図書館こそ未来に
必要なのだ

「図書館は未来に不要だよ」この言葉が劇中に出てきます。そうならないためにニューヨーク公共図書館は何をしているのかがよくわかる映画です。映画を見終えると「図書館こそ未来に必要なのだ」と私は改めて感じました。ニューヨークの公共図書館の舞台裏は想像をはるかに超えるものであり、日本の図書館しか知らない私ですが、こんなにも規模や図書館利用者に対しての思いが違うのかと驚きました。

「図書館が未来で不要と考える人は単に図書館を書庫としか考えていない」というセリフが出てきますが、このセリフが映画を物語っているように思います。図書館は単なる書庫ではないのです。この映画を観て図書館に対しての概念が良い意味で覆されました。約3時間半の上映なので観応えも十分あります。図書館が好きな人、図書館に携わる人にぜひ観てもらいたいです！



国際環境経済学科
1年 小林 俊央

図書館は本を置く
ための場所じゃない

映画はある学者のトークから始まるのですが、圧倒されるのがその次のニューヨーク公共図書館の司書たちの電話対応の様子です。コールセンターさながらに図書館利用者からの問い合わせに対応しており、司書たちはその場で文献を調べて利用者の質問に答えています。なんとこのサービス「人力Google」とも呼ばれているそうです。

そして、私が最も印象に残ったセリフは「図書館は本を置くための場所じゃない」という言葉です。このセリフは図書館幹部たちの会議の中で出てくるのですが、本当にその通りだと実感しました。

この映画には図書館の様々な催しの様子が出てきます。子供への読み聞かせや読書会はもちろん、著名な方々のトーク企画やピアノコンサート、子供たちへの教育支援、パソコン講座、録音本の収録、さらにシニアダンス教室(社交ダンスとかではなくおばあちゃんたちが Earth, Wind & Fire の曲で踊っていました)まであるのです。図書館は本を扱うだけではなく文化的教養を高められる場となるのだと驚きました。日本の図書館もそういう場になるべきだと感じました。

この映画に対してはやはり 3 時間 25 分という長さに抵抗を感じてしまうかもしれませんが、逆に言えばこんなにも長い映画を見ることはなかなかないと思うので今回がよい機会かもしれません。鑑賞後には図書館に対する考えが必ず変わります。ぜひ岩波ホールまで足を運んでみてください。

ドイツ語学科 4 年

伊藤 梨沙

世界最大級〈知の殿堂〉
から考える
図書館の在り方

今回は映画『ニューヨーク公共図書館エクス・リブリス』を鑑賞してきました。神保町の岩波ホールというミニシアターで鑑賞しました。少しレトロな雰囲気が素敵なシアターでした。

鑑賞した映画は、タイトルのニューヨーク公共図書館の裏側に密着したドキュメンタリーです。ニューヨーク公共図書館は 92 の図書館からなる世界最大の〈知の殿堂〉と呼ばれており、世界中の図書館員の憧れの的でもあるそうです。私は司書課程を履修していたので、海外の有名な図書館の裏側を映像で見ることができる！と楽しみしていました。上映時間はなんと

3 時間 40 分という長さ…！（途中 10 分間の休憩を挟みます）図書館での様々な場면을たっぷりと鑑賞することができます。

上映開始からすぐ、リチャード・ドーキンス博士のトーク企画の場面の直後、電話でレファレンス対応をする司書のシーンに移ります。男性と女性の司書が交互に移され、利用者から寄せられる質問に丁寧に答えている様子が映しだされます。その様子はまさにプロフェッショナル。男性司書が「私は中世英語はあまり得意ではないのですが」と言いながらもスラスラと文を訳していく様子には驚き、ニューヨーク公共図書館で〈人力 Google〉と呼ばれていることに納得してしまいました。

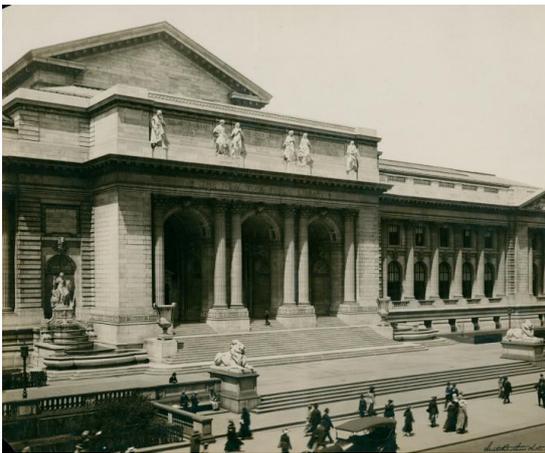
映画全体を通してニューヨーク公共図書館がどれほど情報提供、教育に力を入れているかを目にし、図書館のあり方について考えさせられました。チャイナタウンに近い図書館では中国系住民に向けパソコン講座を開講する、視覚障害のある利用者のために点字の読み方を指導する、就職を目指す人にリクルートフェアを開催する…など、様々な取り組みがされています。図書館は本来、人種や国籍、年齢に関係なく、全ての人が必要な情報を得るための場所である、ということを改めて考えました。そして、その情報の形は本の形には留まらず、音楽であったり、写真などの芸術作品であることもあるのです。

国際環境経済学科
3年 佐川 将大

毎日の生活や
生きることに
密着した図書館

私はこの作品を「図書館＝本を借りるところ」という固定観念を持っている人にこそみてほしいと思います。図書館のあるべき姿を示す、「ランガナタンの五原則」では「図書館は成長する有機体である」と言われています。図書館は日々進化していくメディアに合わせ、進化していかなくてはならない、ということだそうです。映画を鑑賞して、ニューヨーク公共図書館は確かに「成長する有機体」であり、世界中の図書館が目指すべき姿なのではないかと思いました。

もし、この映画を鑑賞し、図書館の裏側について興味を持った方は是非、大学図書館で図書館学の本を読んでみてください。きっと図書館の新しい面を知ることができると思います！



View of the Fifth Avenue facade from the south

私はこの作品を鑑賞して図書館は単なる書庫ではなく性別、人種、年齢関係なく通える場所だと感じました。こんなにも毎日の生活や生きることに密着し様々なプログラムを開催している場所が自分の生活圏内にもあればなんと羨ましくも思いました。教育、福祉、資料収集、講演会、演奏会と、とにかく色々なことをやっていたことに驚き分館が多いのも凄く感じました。ニューヨークの複雑な歴史が一堂に介した感があり、街中の車の音、講演会や説明会を聞いている人々の顔、盛んに意見が交わされる会議の様子などに胸を打たれました。

フレデリック・ワイズマン監督のドキュメンタリー作品は初めて鑑賞したのですが、ナレーションなどはなく、こんなにもシンプルな映画でたくさんの人を魅了できるのには驚きました。また 19 世紀初頭の荘厳なボザール様式の建築物である本館と 92 の分館に 6000 万点のコレクションを誇るニューヨーク公共図書館は、建物自体も個人的には魅力的であり観光客が劇中で撮影していたように自分も訪問したいなと思いました。

印象に残ったシーンとしては本について数人で語り合うシーンが、同じ作品でも読み手によってここまで真二つに評価が分かれることにとっても興味深く感じました。またニューヨーク公共図書館の舞台裏という点で、本に纏わるトークショーや、本の貸し借り、返却作業などが映し出されるのはもちろん、子どもの為のプログラミング教室や中国人移民の為のパソコン講座、点字教室の様子などを観て新鮮な気持ちになりました。意外なところでは、黒人たちが集まるコミュニティが開催されたり、WiFiの貸し出し事業まで行われていることに驚かされます。図書館はインターネットを使えない人たちの孤独を癒す場、情報交換の場となっており、ただ本が所蔵してあるだけの場所ではないと改めて理解させてくれました。



Front facade of The New York Public Library, Dec. 26, 1907

国際関係法学科 1年 市之瀬 美羽

図書館は ただの書庫ではない

今回この映画を鑑賞してまず私が感じたことは、長いということである。勝手に三時間ほどだと考えており、上映前のアナウンスで3時間40分あることを知って落胆した。そんななか、眠気と戦う私の記憶に残ったのは「図書館はただの書庫ではない」という旨のある女性の発言である。また彼女は、図書館は多様性を有すると言っていた。

この映画は図書館で働く方々の働く模様を少しずつ流していくのだが、その仕事がまあ多い。種類はもちろんのこと、1つ1つが重そうである。日本でいう学童保育や塾のような役割も一部担っているように思えた。だから、ニューヨーク公共図書館とその分館においては、ただの書庫でないことも多様性についても納得できる。しかし、ここでそれが日本の図書館に当てはまるのかという疑問がわいた。日本の図書館はただの書庫ではない、といえるだろうか。また、日本の図書館には多様性があるのか。私の地元の図書館では読み聞かせ以外の取り組みを見たことがないと思う。私が知らないだけかもしれないが。

最後に、この映画はニューヨーク公共図書館の様々な取り組みについて知れることはもちろん、それを自分の馴染みの図書館に鑑みて自分の行ってほしい取り組みについて考えることもできる。鑑賞する際は前日に十分に睡眠をとることをおすすめしたい。

国際関係法学科 3年 高橋 真由

ニューヨーク公共 図書館は、まるで デパートのようだ

見るときは相当の覚悟のいるドキュメンタリー映画だと思います。上映時間は3時間以上、間の休憩はわずか10分しかなく、映画の舞台は本館からいくつもある分館まで何十回も移動し、一つ一つの話の内容が深く理解するのも一苦勞でした。しかし、図書館の専門的な知識・情熱がなくても、見てもらえればこの映画の魅力がどんな形でも何かしら伝わるのではないかと私は思います。その理由は、私自身のBiVSメンバーとしての意識だけではなく、プライベートな「私」にも共感を覚えたからです。

内容の構成は、「図書館はどのように公共サービスを展開しているのか」

「ネット社会が進む中で、図書館はどのようにあるべきか」「図書館はどのような活動を行ってきたのか」

「今、図書館はどのような課題と直面しているのか」など、それぞれのテーマについて、図書館に関わる様々な人々が場所や立場を変えながら議論しているというものであります。一見すると内容がとっつきにくいと感じるかもしれませんが、この映画の魅力は、意外な場面で、自分の興味のある分野と図書館のつながりが見えてくるところだと思います。

例えば、舞台芸術図書館という場所で(そのような面白い図書館があることにまず驚きでした)、手話通訳の第一人者の方が、手話と劇を交えながら実演してボランティアたちにレクチャーしていたシーンがあります。その講師の方は、難解な手話の中でも顔の表情や体の素振りで感情豊かに劇を表現されていました。私はその姿を見て「こんなに生き生きとした人がいる、自分もこのような大人になりたい」と心を打たれたのを覚えています。図書館の話を見にきたはずなのに(もちろん図書館と関連はあります)、図書館という一般的な意味の枠を越えて、大きなデパートに来てショッピングしているような感覚がしました。

きっと「図書館のドキュメンタリーを見た」という感想だけでは語れない何かがあると思います。他にも映画に出てくる話はたくさんあります。上に挙げたものはその中のほんの少しのエピソードです。上映期間はあまり長くはありませんので、ぜひ一度ご覧になり、私の感想とは違う何かを感じてもらえると幸いです。



Photo of Central Building from North East



Berenice Abbott Exhibition banner

編集後記

こんにちは！今回から『BiVSの本
だな』の編集を務めることとなりました、
国際環境経済学科1年の小林倭央
と申します。ちなみに下の名前は、わ
おと読みます。Wordで打つと下線ひ
かれるけど本名です(笑)
よろしくお願いします。

さて、ビボス初の企画「映画館に行
こう」の感想特集はいかがでしたか？
図書館についての映画！これはもう
ビボスで見に行きかかないと思った筆
者が提案して実現した企画です。感
想を読んでいただければわかるよう
に、本当に図書館という概念を覆す
映画でした。

そして、この特集に利用されているニ
ューヨーク公共図書館の画像はニ
ューヨーク公共図書館が公開している
「NYPL Digital Collections」から選
んだもので、そこでは自由に利用できる
写真資料85万点が公開されてい
ます。ぜひ利用してみてください。
<https://digitalcollections.nypl.org/>
ニューヨーク公共図書館のSNSア
カウントがあったのでのせておきますね。
映画は見に行けないという方もぜひフ
ォローしてみてください。

Instagram

<https://www.instagram.com/nypl/>

Twitter→<https://twitter.com/nypl>